

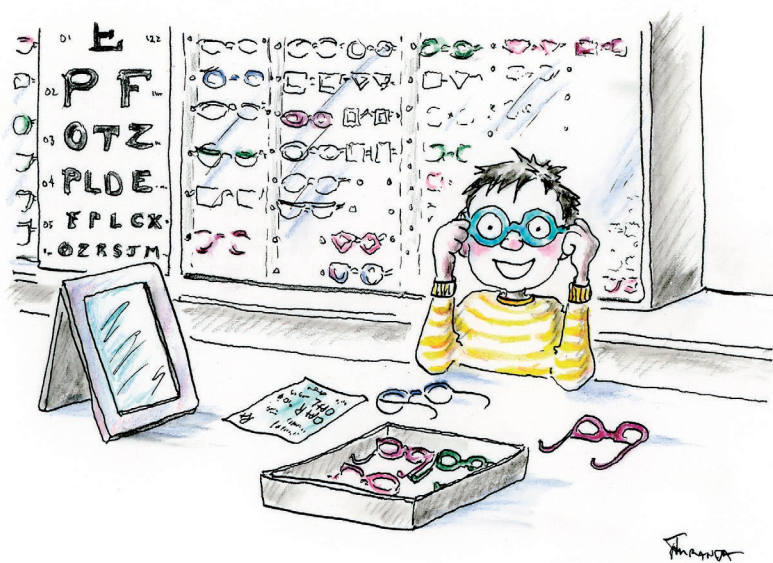
2025年は日本で気象業務が開始してから150年となる節目の年である。1875年6月1日に東京気象台（現在の気象庁）が設置され、気象と地震の観測が開始されたことから、6月1日は気象記念日に制定されている。気象観測の技術は時代とともに進歩しており、アメダスや気象レーダー、気象衛星によって観測の自動化が進み、高解像度のデータが得られるようになった。また、コンピュータによる数値予報の発展に伴い、天気予報の精度は向上し続けている。こうした技術の進歩が土台となつて、天気予報や防災情報は私たちの暮らしや安全に欠か

プリ、基盤など複数のチームが並行して工程を進めていく。プロジェクト全体を推進するプロジェクトマネージャは、遅延を早く検知して対応できるように、各チームの進捗状況を正確に把握できる仕組みを構築することが重要である。一般的に進捗状況は、各チームからタスクや成果物ごとに概況と合わせて報告する、いわゆる進捗報告で確認することが多い。

この進捗報告にて、各チームの進捗状況が一目でわかる方法として天気マークが用いられる。例えば、「晴れ」は順調で問題なし、「曇り」は数日の遅れで要注意、

数 | 理 | の | 窓

天気マークとプロジェクト



せない存在となっている。

天気予報では「晴れ」は太陽、「曇り」は雲、「雨」は傘といった天気を表す「天気マーク」が用いられる。この天気マークの起源には福沢諭吉が関わっている。彼が創刊した『時事新報』では、新聞で初めて天気予報が掲載され、その後天気を表す絵が加えられた。「晴れ」は輝く太陽と傘を閉じた女性、「曇り」は道端にしゃがみこむ男性、「雨」は傘をさすマント姿の男性、というように天気の状況に応じた人物がわかりやすく表現されている。このように天気を表す絵は、現在でもシンプルな天気マークに形を変えて天気予報に利用されている。

ところで、この天気マークはシステム開発の現場でも使われている。大規模な開発プロジェクトでは営業、ア

「雨」は1週間以上の遅れで対策が必要、というように進捗状況に応じた天気マークを定義する。各チームは進捗報告にて、詳細な進捗状況の記載と合わせて進捗状況を総評した天気マークを載せる。これにより、プロジェクトマネージャは日本各地の天気予報を眺めているかのように、プロジェクト全体の状況を直感的に把握でき、どのチームで進捗に遅延が発生しているかがわかる。

このように便利な天気マークだが、主観が入り込むことが難点といえど難点。筆者が担当したプロジェクトでは、数週間「晴れ」の報告を受けて進捗は順調だと安心していただけたところ、突然、翌週に「雨」に急変したことがあった。担当者の進捗状況を良く見せたい気持ちが天気マークに反映されていた。（兼成 智久）